

続ボラッチョ・ボニートのメキシコ便り(No.23)

「ひねた悪魔の物知り」

・・・知らないとは言わせないぜ・・・

中南米では、「アミーゴ(友達)」という言葉とともに、「シンパティコ(感じが良い)」という言葉は、辞書に載っている語感から直訳的に感ずる以上に重く、これは社会生活上重要な言葉の一つだとおもう。

彼らを見下げるような態度を取る人は、概して評判が悪くなり、シンパティコの対極にある、「アンティパティコ(感じが悪い)」と彼らに判断されれば、当然アミーゴにはならない。この感覚の差は歴然で、生活が味気ないものとなる可能性がある。

例えば日常の挨拶が、なくなることは無いだろうが、ハグや頬へのキス挨拶をしていたのが、単なる普通の挨拶に変わるくらいの落差がある。単純なことのようにだが、これはこれで結構、社会生活を過ごしていく上で、一つの潤滑油剤として必要である。

従って、現在従事しているボランティア活動での技術指導についても、教えてやるという上からの目線で接することなく、そうかといって相手に対して卑屈にならず、この二つの関係の微妙なバランスを考えながら、アミーゴの関係を如何に維持するかは、重要なこととなってくる。

このような前提に立って考えたとき、日本人と中南米人との間の、思考パターンの相違を感じさせられる事例の一つとして、日常生活においては比較的自由闊達な彼らも、自分の名誉にかかわることなど、例えば誇り高き彼らにとっては、「知らぬ」と言うことを、あまり口に出して言いたくはないのだろうと思えてしまうことがある。

過去からの経験だが、私に質問に来た人のなかで、「私はその事については知識を持っているが、経験がないので・・・」や、あるいはそれに類したまくら言葉を使う人がいる。また長々と複雑な前置きが長くなることもあり、このような場合には、当方のスペイン語の理解力の限界を超えて、今度は当方が分からなくなる。

いずれにしても、質問事項にストレートに回答して、相手の理解度がいま一つの時、基礎的な部分にも言及するのだが、問題は如何にして相手の自尊心を潰さないかと言うことである。

次のような事例があった。ある大学で、業務分析手法を講義したとき、当地で誰でも知っている料理方法を例にして、演習をした際、一人の男性教官から、「なぜ我々が料理方法を勉強しなければならないのか」と、講義の中で抗議？を受けた。

一般論として誰でもわかるように、あえて料理方法を共通話題として使ったのだが、彼には不満だったのだろう。次回から事前に断りを入れてから説明に入っている。

「知らない」と言う言葉をあまり聞いたことがないということは、日常で色々な相談をされる時の対応として、逆に重大な反作用を及ぼし、当方にとっても心理作戦を強いられる。

外国からわざわざ来ている専門家だから、何でも知っているだろうとの勝手な推測と、専門区分の違いにより、専門分野以外の質問を受けたり、先進諸国への研修などで行った人などは、一般的な知識にはある程度精通していて、当方を値踏みするため、あるいは知識の再確認の意味で質問をしてくることもある。



雑誌から借用

以下は私の推測も少しは入るし、そのときの対応の仕方にもよるだろうが、彼らの質問なり要求事項に、「その事は知らない」あるいは、答えに若干不安があり正確に答えようとして、日本流に、「後から調べてから答える」などと言って、回答を後日に持ち込むと、彼らの日頃の誇り高き感情の裏返しとして、「何だ、あの専門家は何も知らないじゃないか」と、短絡的に、しかも拡大して解釈されてしまう可能性がある。

同じ知らないということでも、彼らと我々とは次元も判断も異なり、私にとっては名誉と死活問題で、実に割の合わない話ではある。従って、答えに若干不安があっても、その場で考えられる最善の回答をひとまず行うのである。議論・討論などでは、まず自分の意見を言う必要があるというのと相通ずるのだろうか。

このあたりの対処を間違えると、講義終了後のアンケートなどで、強烈なコメントをくらう。今回の派遣では、大学教官相手の講義が多く、高学歴で自意識が強い彼らの前で、講義内容というよりは、前述の理由で緊張することが多い。ここで、今回のタイトルの元となったのは、

「**Más sabe el diablo por viejo que por diablo**」(マス サーベ エル ディアブロ ポル ビエッホ ケ ポル ディアブロ と発音し、悪魔が物事を知っているのは、悪魔ということではなく、年をとっていることにより良く知っているという意味である。

日本語の諺を探せば、「亀の甲より年の功」という言葉が浮かんでくる。悪魔といわれるようなことは過去から現在に至るまで、してこなかったと思っているが、年寄りなのは確かであり、シニアボランティア活動を志願したからには、諺で言うところの経験なり、知識は持っていると自負しているものの、タイトルはあえて、ひねた悪魔の物知りとした。(弁解の為付け加えると、「ひねた」とは「古びた、ませた」の意味で、「ひねくれた」の意味ではありませんので、念のため)

最近インターネットの普及により、知識の共有も普遍となり、前の経験から比べると質問される数も少なくなったように感ずるが、質問があるということは、彼らの考えている思考傾向が分かり、当方の勉強にもなるので、積極的に我々老人の知識を、活用してもらいたいものであると思っている。

以上述べたことを別の言葉で言い換えると、技術を教わる彼ら自身が、我々個・個人の業績評価を、絶えずしているようなものである。業績評価に情実がなく、彼らなりの感覚にしたがって、対象相手の実力を判断しているだけに当人にとっては厳しいが、それだけに本気で業務に取り込んでいる者にとっては、今の活動は緊張することは多いものの、やりがいがある仕事というものだろう。

ここまでの心境に至ってはいるが、ボラッチョ・ボニート氏としては、タイトルで表現した、「ひねた悪魔」を通り越して、「ひねくれた悪魔」の方が、いい得て妙だなどと言われないう、シンパティコの状態を保ちながら、日頃の生活を律して過ごして行こうと思う。

(2009年10月21日、先週は初めて泊りがけで、メキシコ市から離れた地域の大学で3日間講義をしました)